

◇拠点形成概要

機 関 名	京都大学
拠点のプログラム名称	生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点
中核となる専攻等名	東南アジア研究所
事業推進担当者	(拠点リーダー) 杉原 薫 教授 外 22 名
<p>[拠点形成の目的]</p> <p>本拠点の目的は、自然生態、政治経済、社会文化を包摂した総合的地域研究に人類の生存基盤を左右する先端的科学技術研究を融合させて、持続型生存基盤パラダイム研究を創成し、それを担う人材を育成することである。</p> <p>近年のアジア・アフリカにおける総合的地域研究の成果から、人間の活動範囲が政治経済のグローバリゼーションによって地理的・空間的に拡大しつつあることに加え、地域はグローバリゼーションの単なる受け手ではなく、地域間交流などを通じて、グローバリゼーションそのものに影響を与える能動的な主体であることが明らかになった。一方、現代社会の要請に応え、地球環境問題、エネルギー問題を視野に入れた21世紀世界を展望するには、資本主義が前提としてきた私的所有権からの発想を相対化し、地表から宇宙までの空間的広がりをもった「生存圏」の物質・エネルギー循環に関わる研究を取り込み、ローカルにもグローバルにも持続可能で、かつ、科学技術・社会制度・価値観の考察を包摂した、新たな生存基盤持続型発展径路を構築するためのパラダイムを創出する必要がある。</p> <p>本拠点では、固有の潜在力を持つ地域社会の特質を長期の時間軸を考慮しつつ方向付け、人類社会が共有できる新しい持続型生存基盤パラダイムを提示する。そして、従来の画一的な科学技術を地域社会密着型・還元型の方向に修正し、地域の多様性と潜在力を引き出す環境・エネルギー技術の開発によって持続型径路の構築を目指す教育研究拠点を形成する。</p> <p>[拠点形成計画及び進捗状況の概要]</p> <p>拠点形成計画：本拠点における人材育成・研究プログラムの特長は、アジア・アフリカ地域に設置した16ヶ所のフィールドステーションと海外観測拠点を活用して、フィールドワークから国際集会にいたるまで、研究パラダイム形成の現場に博士後期課程の大学院生・ポスドク研究員・助教からなる若手研究者を主体的に参加させることによって、人材育成と研究を融合させることにある。グローバルな人材発掘からはじめ、研究・教育を経て、国際キャリア支援にいたる、文理融合型の国際的人材育成を推進する。</p> <p>持続型生存基盤パラダイムを創出し、世界最先端の研究現場における人材育成を推進するために、4つの研究イニシアティブとそれらを総括するパラダイム研究会を組織する。「環境・技術・制度の長期ダイナミクス研究」では、地域の多様性を踏まえて、今後100年間の地域社会のあり方と科学技術開発の方向性を見定める。「人と自然の共生研究」では、生存圏全体の物質・エネルギー循環構造の解明と、地域社会の生活・生業複合における資源循環システムとを有機的に結合する。「地域生存基盤の再生研究」では、森林生活圏を事例とした学際的研究を通じて、持続的利用モデルの提示と先端的科学技術の適用過程を実証的に明らかにする。「地域の知的潜在力研究」では、地域の多様な文化や制度、技術に蓄積された生存基盤持続型の発展径路の発掘とそのモデル化を行う。</p> <p>進捗状況の概要：平成19年度と20年度においては、本プログラムメンバーに加えて、国内外から関連研究者を招へいして、パラダイム研究会を16回、イニシアティブ研究会・ワークショップを112回、国際シンポジウム・セミナーを30回主催・共催し、その成果を速報として公開するワーキングペーパー73冊を刊行した。これらの成果を、「生産から生存へ」、「地表から生存圏へ」、そして「温帯から熱帯へ」の3つの視点を柱としてとりまとめた単行本『地球圏・生命圏・人間圏ー持続型生存基盤とは何かー』（京都大学学術出版会）を印刷中である。</p> <p>同時に、さらに幅広い教育・若手研究者養成のために、大学院生を対象としたフィールドステーション・海外観測拠点派遣支援や論文投稿料支援、若手研究者を対象とした次世代研究イニシアティブ助成や海外派遣助成を実施した。またアジア・アフリカ諸国の優秀な若手研究者を対象として、本拠点に招へいし、最先端の研究現場での議論への参加を促進する若手研究者交流を実施するとともに、修士号取得者を対象とした博士号取得支援の準備を進めている。</p> <p>これらの成果を踏まえて、平成21年4月より、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科にグローバル地域研究専攻を新設するとともに、新専攻に設置される持続型生存基盤論講座に新規で教授2名を採用する。本講座は、「持続型生存基盤研究の方法」や「国際環境医学論」、「熱帯乾燥域生存基盤論」、「熱帯森林資源論」、「人間環境関係論」、「生存圏科学論」等の科目を提供するとともに、本プログラム終了後の教育・人材育成の中核を担う。</p>	

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、総長のリーダーシップの下、「研究科・学部・研究所・センターが一体として研究と教育を推進し、新領域への挑戦を図る」とする大学の長期目標に合致した取組みがなされ、十分な推進体制が組み立てられており、評価できる。

拠点形成全体については、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科にグローバル地域研究専攻、持続型生存基盤論講座を新設、ワーキングペーパーの発刊、新規に教授ポストを配置するなど、戦略的な拠点形成が図られており、評価できる。

人材育成面については、グローバル地域研究専攻の新設、フィールドワークを主体とする学生の支援など、大きな進展が見受けられ、評価できる。

研究活動面については、人間開発指数などの従来の発展指標に代わる「生存基盤指数」の開発、「地球圏」「生命圏」「人間圏」との交錯の中で成立する「生存圏」という新たな領域とされる知見の提示など、研究面での新たな挑戦とその進展があったと評価できる。また、国際学会からの基調招待講演、国内での学会賞、査読付き論文数の増加などの面でも評価できる。

留意事項への対応については、文理間の協力体制構築が望まれていたが、研究イニシアティブやパラダイム研究会の組織化がなされるなど、十分対応していると評価できる。また、「生存基盤持続型発展」概念の展開・深化についても、十分に意識化され、『地球圏・生命圏・人間圏』の刊行にその内容が反映されることが期待される。

今後の展望については、改善・要望点、留意事項を踏まえた今後の拠点形成計画は十分に評価できるが、今後、特にアジア・アフリカ諸国の研究機関・研究者との研究協力の強化は重要である。